



SHIP

船

朝焼けの海を木の葉の様に小さな漁船が水を蹴って疾駆する。海は一面に油を流したように静かに、そして黄金の様に光り輝いている。漁師は大漁の帰途を夢見て、ひたすらに島へ島へと走る。途中彼は、まだ朝もやの水平線の向こうにうっすらと浮かび上る巨大な帆船の影を見たような気がしてスピードを緩めた。……幻だろうか？ 後ろを振り返ると一番乗りを目指して数隻の漁船が追ってくる。彼はもう一度大きく息をして、再び水しぶきを上げて水面を蹴った。

海

私はまだほんの小さな子供だった頃、ふと寝返りをうつ拍子に、暗闇の中で何度か霧笛を聞いたことがあった。私の家から港までどれほど離れていたろうか？ たぶん数キロか、10キロも離れていたかもしれない。それほどまだ街は静かで空気が澄んでいたのだろう。海など見たこともなかった私だけれど、それが海からの音だとわかった。そして、また神妙に眠るのである。

鯨

鯨よ 鯨よ お前の国は 涯もなく
嵐の 吹える 大海だ
力こそ 正義のところでの 力の巨人 涯知らぬ
海原の 王者よ



鯨の歌

南の島特有の低く生い繁る亜熱帯植物を掻き分けて、長く深い緑の壁をくぐり抜けると、そこにはもう一つの海があった。その静かな入江は死にたえた港。入江の中央に海に向かって真っすぐに突き出したコンクリートの桟橋は、長い時の波間に丸くなり小石を剥き出し、堆積する砂利の為に随分浅くなっている。そしてそのほかには此所には何も無い。静寂の間に聞こえるのはカラカラと石ころを転がす波の音。その自然の入江は数十年昔には、繁栄を極めた鯨漁の港だったという。——小笠原諸島 母島にて
『いや せみ鯨だ！』——『汐吹きを見たんだ！』
またと見られんほど きれいな虹を二本吹きやがった。
奴あ脂でずっしりつまってるんだ。

NEWS

9月より、ミルクホールの新メニューが登場致します。このところの円高続きで、輸入酒が値下がりし種類も豊富になりました。ミルクホール従来のメニューにありますが輸入酒を値下げし、新たに沢山のメニューが加わります。根強い人気のパーボンはワイルドターキーを始め約10種類以上に、ジン、ウォッカ、ラム、テキーラ、中国酒、リキュールなど全て新メニューが加わります。又ワイン、シェリー酒を始めますから、約数十種類のカクテルを楽しんで頂けるようになります。又ちまたでは、『ビールは、DRY！』などという名付けてDRY戦争なるものでたいそう賑やかですが、私共がミルクホールの御客様方の声をじっと耳をすまして聞いていますと『キリンの瓶ビールが飲みたい』『たまには黒ビールもいいな』という小さなつぶやきが聞こえました。というわけで、ビールはキリンの瓶ビール、黒ビール、そしてハイネケンの瓶ビールに変わります。ミルクホールのバーテンダー達はははりきりで新メニューの準備をしております。その他、Bourbon WeekやCocktail Weekなどの企画を組んで新メニューの中からバーテンダーお勧めの品を特にサービスさせていただきます。御期待下さい。

ミルクホールタイムス編集部より
いつも御愛読有り難うございます。
ミルクホールタイムス編集部では定期購読者を募集しております。
お申込みの御客様にはミルクホールタイムス[月刊]の他に、ミルクホールの催事予定、インフォメーション等を郵送致します。
御希望の御客様は備え付けの申込み用紙に60円切手12枚か、720円を添えてお申込み下さい。



COLUMN



鎌倉の町には細長い路地が沢山ある。鎌倉に住む人のほとんどがその路地のどれかを通して家路につく。路地は複雑に枝わかれをしていて、まちがって他所の人が入ってしまうとなかなか出てくる事が出来ない。道巾は狭く、人と自転車がやっすれちがえる程度である。

その路地の一番奥の方に公吾の家はあった。木造下見板の家は、大きくもなく小さくもなく質素な庶民の家といった感じだ。路地の中の家には塀がなくてはならない。なぜなら路地を作っているのはその塀であるからだ。公吾の家には黒い塀があった。最近の鎌倉では板塀がめっきり減ってしまい、ほとんどの家がブロック塀に造りかえた。黒い板塀となると小町あたりでは公吾の家しかない。それは公吾の父が塗り替えたもので、もともとは茶色い塀だった。死ぬまえの数か月間公吾の父は、黒いものがひどく気に入り、何でもかんでも黒くしたのである。茶色の革を黒にかえ、白髪を黒く染めた。公吾が生まれた日は、赤い鯛でなく黒い鯛で祝った。公吾が生まれるとすぐに父は死んだ。父の顔を公吾は知らないが、黒い塀は父の細かな表情を想像させた。

公吾は、路地で遊び成長した。鎌倉の路地のことは誰よりもよく知っていると感じている。公吾は今二十歳である。毎日路地を通して家に帰ってくる。駅から黒い塀までは十六通りの行き方があった。公吾はその全ての道順を正確に覚えている。広い路地もあれば狭い路地もある。十六が十六とも少しづつ違った顔を持っていた。ただどの路地も最後は黒い塀に行き着くのである。黒い塀が路地の終わりなのである。嬉しくてたまらない時、公吾は明るい路地だけを選んで通った。絶望を感じたり、悲しい思いをした時には暗い路地を選んだ。十六の路地はどれも好きだったが、暗い路地はしっとりとして特別美しいと公吾は感じた。二十歳になって濡った路地を通して帰る回数が増えていった。

今年の夏、公吾は始めて酔って家に帰ってきた。口もきけ程酔っていた。ふらふらと路地に入ってひたすらに歩いたのである。途中誰かに声を掛けられたが答えなかった。気が付くと黒い塀の前にいた。あっという間である。次の朝になっても、どの道でもどう通ったか思い出せなかった。

公吾はそういう人生にあこがれた。あっという間に、待ちわびた黒い塀にたどり着くのである。それも悪くないと公吾は思った。

